村菴和尚『金玉和襟集』について

渡辺守邦

はじめに

まぼろしの書『金玉和襟集』が翻刻により公刊され、全容を現わした。[1] 村菴和尚とは南禅寺聴松院に住した希世霊彦（一四〇四～八八）のこと、五山の詩僧として喧伝した。『金玉和襟集』は詩語を初学者向けに解説した書である。伝本としては今回紹介された寛文期の板本があるのみ、この寛文板本も意味の通じない箇所を少なしとせず、テキストとしての資質に問題を孕むことがこの翻刻により明らかになった。

そんなところに、『金玉和襟集』の一本が古書店の目録に載り、五季文庫の有に帰した。新出本は寛文板の求板本であって新しみには欠けるが、朱の書込みによって随所が訂正される。本稿はこの書込みを手がかりに『金玉和襟集』に籠めた村菴の真意に迫る、その糸口を探ってみようとするものである。

＊

山田忠雄氏によれば『金玉和襟集』は詩語七八七を収録、一六の部立に分類したのち、詩語一つひとつを簡潔に注解する。[2] 詩語は漢字二あるいは三文字と短く、四文字に及ぶことは稀なところから、柳田征司氏は聯句詠作の便を計ったものか[3]とされる。つまり、『金玉和襟集』は『詩学大成抄』が〈聯字〉と呼ぶ知的に凝縮された詩語[4]を集成し、高名な村菴和尚が〈解〉を加えた、一種の抄物である。

伝本の稀な書物で、『国書総目録』も元禄の書籍目録に依るとして所蔵者を記さない。伝本の初めて明らかになったのは、山田忠雄氏によるご家蔵本の紹介である。[5] この本は刊記を、

寛文十庚戌年暮冬吉辰／「洛陽三条室町／井筒屋伝兵衛開板」

とするが、山田氏によれば、カギ括弧でくくった箇所は明らかな入木、板面また摩滅少なからず、求板であろうとのこと。その後二〇年を経過して、富山市立図書館に寛文一〇年京都の谷岡七左衛門刊の一本を蔵することが明らかになった。同館の蔵書目録に[6]次のようにある。

金玉和襟集　キンギョク　ワキンシュウ　刊　村菴解
下御霊前〔京都〕谷岡七左衛門　寛文一〇〔一六七〇〕
刊　七二丁　一五・八×一一・二cm　題簽：金玉和襟集
首題：金玉和襟集　刊記：寛文十庚戌年暮冬吉辰／
下御霊前　谷岡七左衛門板行

そして今回の伊藤善隆氏による翻刻へと至る。

底本は寛文一〇年谷岡七左衛門の刊行、富山市立図書館蔵本と同板であり、山田忠雄氏蔵本に先行する。別に元禄一一年板以後の書籍目録が報ずる「池田や」板[7]もあったらしいが、今日その所在を詳らかにしない。また、柳田氏の言及は古書の売立目録に載った写真によるものとのこと、つまり伝本としては、今回翻刻の底本と富山市立図書館の蔵本、そして山田氏蔵本の都合二種三点しか確認できない。また、写本の伝来も聞かない。

そんな状況下に出現したのが五季文庫蔵本である。新出本は寛文十年の刊記を備えるものの、山田忠雄氏蔵本と同じ井筒屋による後刷本であった。加えて、朱の書込み多数を持つ。書込みを行った者の素性は不明、[8] 違和を覚えた箇所に朱訂を加えたという態のものであり、誤読・誤植の指摘が多く、眉上その他の余白を用いて補記したりもする。またその指摘の多くは素直に納得できる。それゆえ新出本に接した最初の感懐は、寛文十年板がこれほど多くの箇所に疑問を差挟む余地を残すテキストであったのか、という驚きであった。

もとより、この朱訂を鵜呑みにして正誤を云々するのは賢明でない。そこに示されているのは、近世中期の一読書子が記した覚書きであり、過半が判断材料の提示を欠く。それゆえ、朱訂の適否に判断を下すまえになすべきことが自ずと定まる。それは書込みによる訂正を裏付ける文献資料の探索であろう。

そして、こんな風な趣旨に沿った追求により、朱訂に適否の判断が下されて寛文板の本文が正されるはずであるが、成果はそれに止まらない。もし、朱訂一つひとつの検

証を積み重ねて、誤写・誤読を促したカラクリのようなものが抽出できたならば、この原理を朱訂の及ばなかった範囲にまで拡げることにより、さらに隠れた誤りが発掘され、正されることになるであろう。それはまた、対校すべき異本を持ちあわせない『金玉和襟集』に、本文校訂のための新たな材料を提供することになるはずである。

＊

以下に実際の作業を展開してみたいと思うが、その前に、朱筆による書込みを単色印刷の誌面にいかに再現したのかについて、あらあらを説明しておきたい。

まず、長短に関わりなく、朱訂の存在する段の全文を伊藤氏の翻刻に従って掲げ、底本における所在を「（一ウ）」のごとく添える。また『金玉和襟集』はほとんどの漢字にルビを振るが、正誤に関わる場合を除いて省いた。そして訂正を指示された箇所を次のごとく「　」で囲う。

聞レ経鹿　寺辺デ山林ノ鹿ハ僧ニナレテ常ニ経ヲヨム声ヲ「ナ」ク也（一ウ）。　→キ

底本では「ナ」に朱点を打って抹消し、「キ」と朱で書き添える。「声ヲナク也」を誤りとし「声ヲキク也」に正せとの意味であろうが、これを段末に「→キ」と表示した。

さらに例を追加する。

竹香　杜句云、「①如」風「②吹」細「③々香」ト作レリ。此句ヨリ竹香トハスル也（一七オ）。　→①（削除）②吹（テ）　③々（トシテシ）香

複数の朱訂が施されたケースである。この場合、それぞれに番号を与えることにより対応した。①「如」は五季本の状況をやや詳しく述べれば、この一字に朱を打ったうえで「ヒ」と傍記する。ミセケチに使う「ヒ」である。疑問を喚起したつもりであろう。そこで答えを「杜句ニ云ク」の「杜句」に求め「雨洗娟娟浄　風吹細細香」（杜甫「厳鄭公宅同詠竹」）の一聯を得て、「如」は衍字と判断し、「①（削除）」とした。②③は送りがなの追加である。そのほか、

開二凌室一　六月朔日ノアツキ日、口ヲ開テ凌ヲキル也（六四オ）。　【頭書】凌―ハ氷室ノコトナリ

これは頭書を持つ例である。頭書は訂正の理由を敷衍するケースが多いが、ここでは正誤を離れて「凌室」を辞書的に解説している。「凌―」は凌室のこと、氷室を開いて氷を切出すのである。

＊

いよいよ朱訂の適否を検証する作業に入るが、朱訂は振

り仮名すなわちルビの訂正が目立つ。総ルビ的なルビの振りかたによるものであろう。数の多さが際だつだけではない。次のごときお粗末さえも摘出する。

苔「蝕」　蝕トハ虫ノ物ヲクウゴトク苔ノ次第ニヒロクハユルガ地ヲクウガゴトク也（二二ウ）。　→蝕

単純な手違いではあろうが、同じ一行にあって「蝕」のルビが見出し語と語釈とで食い違う。

そんな不自然なルビに、次の例が追い打ちをかけて、無邪気さ、無頓着の印象を増幅する。

翁「矍鑠」　老翁ノケナゲヲ云也（四二オ）。【頭書】史ニハ矍―　クハクシヤクトカナツク

矍鑠とは後漢の老将軍馬援の心意気を評した語として知られるが、ここでは「鑠」をレキと読み誤る。「礫（レキこいし）」「轢（レキ　ふみにじる）」などの読みに引かれた結果であろう。そして、次の例もまた同様な理由に基づくもののようである。

寒「砧」　秋ノ夜ノ霜ノフリテサムキ砧ヲ打コヘヲ云也。砧トハ、衣ウツコエ也。亦経ヲトク如ニナク虫有。ソノ虫ノ名ヲモ「砧」ト云也（六七ウ）。　→砧

読書子の訂正は適切であって、底本「砧（テン）」というルビは「貼（テン・テフ）」「點（テン・セン）」との混淆により生じた誤りと考えられる。〈鑠・礫・轢〉あるいは〈砧・貼・點〉のような類同は『小野篁歌字尽』の好んで採りあげるところであり、節用集の類にこれを分亳字あるいは点画少異字と名付ける。それゆえここではこの種の現象を点画少異字による誤読と呼んでおくことにしたい。

次に挙げる例は、また別の理由にもとづく読み誤りのようである。

「涼」一掬　ツヨウアツキ時、風ノ吹ハ、一スクイホドアル也（六三ウ）。　→涼【頭書】一掬ハニギルホドアル也

傘涼樹　傘ヲサシタル如クニ、木ノ枝ノヒロカリテ有ヲ云也。其木ノ下ニ夏涼デアソブニ、涼風ガ吹度ニスゞシキヲ云也（六二オ）

涼渡レ榻　夏ノ涼風ガ、坐シ居タル榻ヲ吹ワタル也（六二オ）。

うしろの二例は朱訂を免れている。「涼」は初秋の季節感を籠めて多用され、「六月」と「七月」との二つの部立に限っても「夕涼」（五八ウ）、「涼風」（五九オ）など、「涼」の音読は三二例に達する。そのほとんどがルビを「レウ」とする中に、「涼一掬」「傘涼樹」のごとくにルビを「レイ」とする例を交えるが、両者の間に使い分けの意図は見られ

ない。さらに、

新涼　韓昌黎ガ云、新涼入二郊墟一、灯火稍可レ親ト作。此詩ハ秋ニナツテ涼ト云也。灯ノ下ニテ学問ヲスルト云心也（六五オ）。

韓檠　前ノ新涼ノ下ニ委クミヘタリ。檠トハ、短檠ノコト也（六六オ）。

このような乱暴と評するしかない用例に出合ったりもする。

点画少異字による混淆に加えて、こんなアナーキーな状況がなぜ生じるのか。その謎を解くカギが以下の二つの例から摘出できるもののようである。

披霧　如下披二「①雪」霧一覩中青天上ト云テ物ハレヤカニキサンジナル事ヲ云。初タル人トヨリ合「②キリマシタル」事ニタトユル也。亦披雲トモ杜句初歓トモ云（二三ウ）。　→①雲　②カタリマジワル

晋の楽広の人柄を賛えた「此人之水鏡、見レ之瑩然、若下披二雲霧一而覩中青天上也」（晋書・列伝一三）による表現である。語釈にいう「杜句初歓トモ云」とは、やや舌足らずの表現ながら、「披霧初歓夕　高秋爽気澄」（杜甫「贈特進汝陽王二十韻」）を指すものか。②「キリマシタル」の意味は不明。山田忠雄氏は雇用の延長を意味する室町時代語「キリマス」かとする。[9]

第二の例は次のごとくである。

不堪七　「①枕者済叔」ト云人、隠居シテ活計スルヲ、知「②夢」ノ人俸禄セヨト云ヘバ、カナハヌコトガ七ツアリト云也（三七オ）。　→①（削ル）　②音

【頭書】晋ノ嵇叔夜カ故事ナリ

①は五季本にこの四字を朱線で消したままに放置する。【頭書】がその欠を補ったつもりであろう。嵇叔夜の「不堪七ツ」とは、「……又人倫有レ礼、朝廷有レ法。自惟至レ熟、有二必不レ堪者七一」（『文選』四三・書下・嵇叔夜「与山巨源絶交書一首」）を指すものであろう。嵇叔夜は竹林の七賢の嵇康のこと、活計を案じて仕官を勧める山巨源に返書を送り、宮仕えの我慢し難きこと七箇条を挙げ、絶交を告げた。この文脈に沿って読書子は②「夢」を「音」の写し誤りとする。

ここに、「披霧」（二三ウ）の条の「雲霧」から「雪霧」へ、「不堪七」（三七オ）の条の「知音」から「知夢」へという、いささか不可解な誤写が浮かび出た。何が不可解か。「雲・雪」と「音・夢」とは字形の類似による誤写、とくに草体に崩した場合の誤読の可能性も充分に考えられる。しかし「雲霧」の「雲」を「雪」に、「知音」の「音」を「夢」にと、ご丁寧にも、ルビまでひっくるめて見誤ったり写し誤るとは、いかなることであろうか。こんな間違いは、原本

に「雲霧」「知音」とルビがあったとでも考えない限りありえない。しかし、村菴の原本はもちろん、その転写本においてさえ、かかる奇想天外なルビが罷り通ったはずはない。不可解と評するゆえんである。

我々は朱訂に従って「雪」は「雲」の、「夢」は「音」の誤写と見なして論を進め、考えが行き詰った。しかしここで一歩退き、村菴の原本にはルビなしで「雲霧」「知音」とあり、ルビは「雲」を「雪」に、「音」を「夢」に写し誤ったのちに振られたものと、誤写とルビとの間に時間差を置いて考えるならば、行き詰まりも不思議も解消する。トラブルの原因はもちろん誤写にあったが、混乱を増幅させた責任は、後出しの振り仮名にあったと考えるのである。

ここで思い至るのは、次のような奇妙な訓点の存在である。

惜レ春-鳥一　春ノ暮ルヲ惜テ啼鳥也（五五オ）。
「傾二レ国-色一」　美人ヲ見テ一国ノ人ミナカタムク也。傾城トモスル。色ハ女也（三九ウ）。　→傾-国色

「惜レ春-鳥一」も「傾二レ国-色一」も言わんとするところは理解できる。あるいは「惜レ春-鳥一」は「春ヲ惜ム鳥」「春ヲ鳥ノ惜ム」と両様の読みが許されることを言おうとしているのかもしれない。この伝をもってすると「傾二レ国-色一」も「国色ヲ傾クル」という読みを許容することになるが、よもやそんなことはあるまい。読書子の読みに従って「傾国ノ色」とし、あるいは「国ヲ傾クル色」を容認するのが穏当なところか。

さらに、こんな訓点もある。

尖レ於レ剣　山モトガツタハ、剣ヨリモスルド也。

尖トハ、トガリタルヲ云也（四一ウ）。

この一条の意味は明解であろう。読書子も訂正の朱を加えていない。しかし、言わんとするところは分りやすいものの、この見出しを声に出して読むとき、はたして何と読ませるつもりであろうか。そんな疑問を抱かせるのは、どうやら見出し語に振られたルビのようである。漢字一つひとつに添えられたルビは、この例の場合、厳密に区別していえば、その文字の「意味」であって「読み」ではない。「意味」は見出し語の領域ではなく解説で説明されるべきであろうし、現に「剣ヨリモスルド也」と語義の領域で説明されている。見出し語のルビがサービス過剰であって、なおかつ読みを妨げている。

村菴和尚の時代の点法がいかなるものであったかを詳らかにしないが、この見出し語を「剣ヨリモスルド也」の意に読ませる訓法として、「尖レ於レ剣」というレ点の重連がはたして適切だったのであろうか。たとえば、桂庵玄樹な

らば少し違う点を打っていたであろう。『桂菴和尚家法倭点』[10]に、レ点をカリガネ点と呼んで次のようにいう。

二字三字。乃至五六字マテモ。下ヨリ読ノホセハ。可レ用レ鴈金也。不レ可レ用二一二点一。雖レ三字。中于於等置字アラハ。可レ用二一二点一。

桂庵風の訓法ならば、「剣ヨリモスルド也」は「尖二於剣一」となる。

『金玉和襟集』の奇矯な訓法がなぜ生じたのか。その理由はいろいろと考えられるであろうが、最も単純にして明解な答えは、村菴の原本には返り点がなく、施点は後人の賢しらであった、ということになる。

村菴の原本に返り点の記載はなかったとの推測は、そのまま、とかくに常軌を外れがちなルビに結びつく。旺盛なサービス精神は漢字という漢字にルビを添えようとする熱意に、蛮勇は恣意と評して過言と思えないヨミに通じる。そうであるとすると、ルビもまた返り点に加筆した人物の仕業であり、原本にルビは存在しなかった、ということになる。

もちろん村菴の原本にはルビも返り点も全くなかったとするのは考えすぎで、むしろ、五山の仮名抄と同程度であったとするのが穏当なところかもしれない。

そして、これはまた、返り点やルビに煩わされることなく『金玉和襟集』に対応すべきことを意味する。

＊

村菴和尚の原本にルビはなかったという想定は読書子による朱訂の過半が徒労であったことを意味する。しかし残る幾ばくかの朱訂はそのまま顧慮に価し、なお検証を必要とするもののようである。たとえば誤写がある。板行以前に長い転写による経過を持ったと想像されるところからも、誤写を度外視することはできない。

誤写か否かの判定は容易ではない。ルビならば漢字ごとに固有の音と訓が定まるので、辞典に頼ることができるし、返り点もルールがそれほど複雑多岐にわたらないので、手に余ることは少ないであろう。しかし原本や校合本を持たないテキストの誤写の詮索に頼れるものは少ない。しいていえば、嗅覚とでも呼ぶべきある種のカンを頼りに、些末に着目した揚げ足とりに類する詮議に及ぶかもしれない。そんなえげつない詮索も、資料による裏付けを伴うことにより、少しは信憑性を増すことができるであろう。たとえば、次のごとくにである。

短「昔」　秋月ハ短キホトニ云也（六七オ）。　→昔

読書子は「昔」のルビを朱訂の対象に採りあげたが、先の

言挙げに従って、ルビの正誤を無視する。そうすると、ここで気になる箇所は二つ、その一は「昝」、その二は「秋月」である。

まず「昝」について。この字は漢和辞典に、

昝（サン）　子感切　姓（シヤウ）也（三百四「日」・巻二十8ウ・290）。

とする。いま、漢和辞典として『大広益会玉篇』[11]を利用した。以下にも〈辞典〉と略称して引用する。〈辞典〉に「昝」の音は「子感」の反切でサン、姓に使われる以外の用例はないとする。つまり「短昝」では意味をなさない。そこでルビの混淆を問題にしたときに用いた点画少異字の考えを援用して「昝」「晷」などの類字を着想し、この二語を〈辞典〉で確かめてみた。

昝（キウ）　其久切　災（ワザハヒ）也。トガ（二十三「人」・巻三6オ・105）。

晷（ヤ）　居美切　以レ表（テヘウヲ）度（ハカル）レ日（ヲ）也。ヒカゲ（三百四「日」・巻二十8オ・290）。

「昝」でも意味が落ち着かない。

「晷」はいかがであろうか。〈辞典〉の語釈にいう「表ヲ以テ日ヲ度ル」の「表」とは太陽を観測するために立てる柱状の機器[12]のことで、「表」が地面に落す影すなわち「日あし」を測って季節・時間の推移を知る。それゆえヒカゲの訓となるのであろう。『金玉和襟集』の「短昝」を「短晷」の誤写とするとき、意味が落ち着く。「短晷」とは短日のこと、ゆえに語釈にいう「秋月ハ短キホトニ」の「秋月」も「秋日」の誤りということで落着する。「短昝」（六七オ）の条には、朱訂を逃れて、誤りが二箇所に潜んでいた。

以上の推論に対する裏付けを同時代の資料に徴してみよう。

短晷（タンキ）　晋ノ潘岳ガ秋興ノ賦（ケウフ）ニ何微陽之（ナンソビノ）――　ナニゴトニ、秋ハ、日ガミシカイソ、夜ハ長（イ）ソト云ソ（詩学大成抄・八・秋・5）[13]。

この詩句の原拠は「何微陽之短晷　覚涼夜之方永」（潘岳「秋興賦并序」）である。読書子は「短昝（キウ）」を「短昝（キ）」とルビだけ訂すが、これで「晷（キ　ひかげ）」と直したつもりだったのであろう。

点画少異に因む誤写として、こんな例もある。

「嬾（ドン）」鶯（ヨウ）　春ノ初ノ鶯也。「嬾（ドン）」鶯モノクサクシテ啼事也（四七ウ）。　→嬾（ラン）・懶（ラン）（ウシ）【頭書】嫩（トン）カ

この一段に下された訂正をやや詳しく説明してみる。まず二つの「嬾」に朱点を打つ。次に見出しの「嬾」のルビをランと訂し、さらに「懶（ラン）（モノ）（ウシ）」と朱で書き添える。そのうえさらに「嫩（トン）カ」と頭書するのである。どうやら、朱筆を下すに当たり、読書子にはためらいがあったらしい。初春のウグイスを「嫩鶯」と呼ぶことに疑念を感じたものの、〈嬾・懶・嫩〉の使い分けに、いま一つ自信を持てなかっ

たものか。

そこで読書子に代わって、『金玉和襟集』におけるこの三文字の用例をすべて抜出し、使い分けを検証してみることにしよう。

暗緑　夏ノ木シゲリテクラキヲ云。嬾(i)（ドン）緑トモ新緑トモ云也（一四ウ）。

午倦　倦トハ物ニ退屈スル心ヲ云。言心ハ「午①トモ」懶(ii)（モノウキ）時ニハ物クサキ事ヲ云。「亦②ハ午スル也。」心ハ同事也（一五ウ）。　→①「午（ヒル）」②（削除）

鞭レ懶(iii)（ラン）　懶(iv)（モノウ）クシテ心ノ重ヲハゲマシテ詩ヲ作テアソブコト也（一九ウ）。

懶(v)（ラン）雲　モノウキクモ也。言ハ、雲ノモノウクマメシゲナキ心也（二一ウ）。

春懶(vi)（ラン）　アヂキナク物ウイモノ也。春懶(vii)（ラン）

如レ秋ト云テアヂキナイ也（四九オ）。

鶯慵燕懶(viii)（ラン）　鶯ト燕トノ、モノ「ク」サケナル也（五二オ）　→グ。

嬾(ix)（ドン）涼　夏ノハシメ、涼風ノ吹ヲ云也（五八ウ）。

iからixまでの用例九箇が挙がった。先には無視するとした底本のルビを「嬾」と「懶」に限り括弧を使って添えたが、ルビに関して読書子の朱訂はない。

この九例を二グループに分つことができる。〔ii～viii〕と残りの〔i・ix〕とである。〔ii～viii〕グループは語釈に、

物クサキ・モノウキ・アヂキナク物ウイ・アヂキナイ・モノクサケ

などの表現を含み、〔アジキナイ・モノウイ〕グループと名づけることができる。残りの〔i・ix〕も同様にして語釈からキーワードを捜して、iから「新緑」、viiから「夏ノハシメ」が採取できた。それゆれこれを〔若イ・未熟ナ〕グループと称することにする。

この二グループは、また、「懶」「嬾」と文字を使い分けていることにも気づく。両者を比べてみると、

ii～viii〔アジキナイ・モノウイ〕……「懶」

i・ix〔若イ・未熟ナ〕……「嬾」

となる。この使い分けは、しかし、〈辞典〉の下す語義に合わない。〈辞典〉にはこのように説明されている。

懶(ラン)　力旱切　俗嬾字。モノウシ（八十七「心」・巻八3オ・158）。

嬾(ラン)　力但切　惰也。ヲコタル　モノウシ（三十五「女」・巻三11オ・110）。

『大広益会玉篇』は〔ii～viii〕に当てられた「懶」も〔i・ix〕に当てられた「嬾」も、ともに「モノウシ」の意味と

する。音も「ラン」で変らない。それだけではない、「嬾」は「懶」の俗字と言い切っている。もちろん〔若イ・未熟ナ〕の意味に触れることはない。

これは〔i・viii〕に当てた「嬾」が適切でなかたことを意味する。では、いかなる字を当てるべきであったのか、その答えは「嫩」であろう。「嫩」であると勇ましく断言できないのは、この字を〈辞典〉に探し出せなかったからである。ただし、次のような記事にたどりつくことができた。

嫄（ゼン）　如鱗切　好兒（カホヨキ）。又嫩同。ワカシ（三十五「女」・巻三11ウ・110）。

親字としての立項ではないので音を確認できないが、『和玉篇』に「嫩（トン）　ワカシ」とするところからも、読書子の【頭書】のごとく読みが「ドン」であったことは間違いあるまい。〔若ク・未熟ナ〕グループの「嬾」に添えられたルビ「ドン」とも暗合する。このようにして〔i・ix〕に当てられた「嬾」は点画少異字「嫩（ドン）」の誤写、という結論に達する。

ここで「嬾鴦」（四七ウ）の条まで立ちもどる。読書子が「嬾（ラン）」か「懶（ラン）」か、はたまた「嫩（ドン）」かと朱筆の筆先をせせらせた一条である。右に述べたところに即して訂した正解を示せば、この一条は次のごとくでなければならない。

嫩鴦　春ノ初ノ鴦也。嬾鴦、モノクサクシテ啼事也。

ここに、呂律もままならぬ「嫩（ドン）鴦」から啼くことに倦んだ「嬾（ラン）鴦」まで春三ヶ月を要したウグイスの変身が、村菴和尚の手妻により、瞬時に成就する。[14]

次にカナの誤写の例を二つ。

「①籜（エキ）」龍「②迸（ヘイ）」　竹ノ生出ルヲ云。多キハ竹ノ皮也（五七オ）。　→①籜（タク）　②迸（ホドバシル）

朱訂の二箇所、いずれも読書子の指摘を肯うべきであろう。その例証を挙げてみる。

迸（ル）二林藪（ニ）一　盧仝　竹林吾最惜（レモム）。新笋好（シ）レ看一守（スルニ）。万籜抱（テ）二龍児（ヲ）一。攢（アツマリテ）迸（ル）溢（テ）二林藪（ニ）一。籜龍正（ニ）称（スレ）兎（ヲ）。莫（レ）三殺（シテ）入（ル）二汝（カ）口（ニ）一。丁寧嘱（ニ）二託（スニ）汝（ヲ）一。活（センヤ）二籜龍（ヲ）一否（ヤ）（円機活法・二二・笋[15]）。

籜龍　朱喬年　春風吹起（キス）籜龍児（同）。

籜龍はタケノコのこと、竹林のそこここで一斉に頭をもたげる姿が「籜龍迸ル」であり「迸二林藪一」なのであろう。読書子は「籜」の読みをタクと訂正したが、念のためにと〈辞典〉に確認を求めたところ、予想だもしなかった誤写を掘り当てることになった。

籜（タク）　他各切　竹籜也。タケノカハ（百六十六「竹」・巻十四5ウ・228）。

「籜龍」はタケノコだが、「籜」一字だけだと竹の皮の意味だという。[16] これで語釈にある「多キハ竹ノ皮也」という、奥歯に何かの挟まったような行文がすんなりと通じる。「多」を仮名に使って、「タク（籜）ハ竹ノ皮也」だったのであろう。

カナの誤写の第二例、

鶴烟　ツルガ茶ヲセンジテ烟ヲ「アゲタ」事有也（一六オ）。　→サケタ

この一段もまたは読書子の朱訂をそのまま肯定すべきであろう。それゆえ文証を挙げるのみに止める。

鶴ハ避サケテ二茶烟ヲ一湯眼沸ワク、蜂ハ啣フクンテ二茶粉ヲ一蜜脾ヒ香ハシ。上ノ句ハ茶ヲセンズルフロノ辺ニ、鶴ガイタガ、茶ノ湯ヲセンスル烟ノツヲウフスボルヲ、イヤサニ、タチノイタソ。湯ハワイテ、湯ガニユレハ、魚ノ目ノヤウニ、コマカナ珠ノヤウニ、イツクモ（ママ）、ニエアカルソ。ソレヲ湯眼ト云ソ。（詩学大成抄・五・春・55）

考証抜きで、誤写と直ちに決着のつくのは詩句の引用の場合も同様である。そんな例を並べてみる。【参考】として原詩を添えた。

花隔レ霧　杜ガ句、老「①蚕花サンクワ」似二霧ムー「②中見チウニミル」一。年ヨリノ目カスミテ、キリノウチニ見ルヤウナ也（五四オ）。　→①年花ネンノハナハ　②中看チウノカンニ

【参考】春水船如天上坐　老年花似霧中看（杜甫「小寒食舟中作」）

秋五月　杜句ニ「波唐ハタウ」五月秋ト作レリ。五月ナレドモ、秋ノヤウニ涼キ也（六一ウ）。　→陂塘ヒタウ

【参考】帰路翻蕭颯　陂塘五月秋（杜甫「渚貴公子丈八沟携妓納凉晚際遇雨二首其二」）

魚依レ藻　杜カ句ニ寒魚依二蜜「藻モニ」一ト作レリ。水ニ有モノ也（七二オ）。　→藻ソウニ

【参考】寒魚依密藻　宿鷺起円沙（杜甫「草堂即事」）

「花隔レ霧」「秋五月」の二例、いずれも的を射ているが、「魚依レ藻」では射損じたもののようである。読書子は「蜜藻・密藻」の違いを見過ごしている。

同様にして読書子の朱訂から落ちこぼれた誤写の指摘も可能になる。そんな例いくつかを挙げてみる。

臥鐘クワシヤウ　杜句ニ露景臥鐘ト作レリ。破寺ノ鐘カネ也。其ソリタルカネガ地ニフシテ有ヲ云（一八ウ）。

【参考】秋花危石底　晩景臥鐘辺（杜甫「秦州雑詩二十首其十二」）

推二残暑一　山谷ノ句ニ清風挽不レ来、残暑推不レ去（六四ウ）。

【参考】西風挽不来　残暑推不去（黄庭堅「和答外舅孫華老」）

＊

読書子の朱訂に導かれて、寛文板『金玉和袖集』に村菴時代の読みとは考えがたいルビの跋扈することや、点画のはしばしが胡乱な漢字の跳梁する事実にたどり着いた。この先さらに転写によって生じたであろう脱文とか後人による補足などを検証することにより、村菴和尚が『金玉和袖集』に盛ろうとしたものの実体が明らかになると思われるが、それは別稿を期すことにして、とりあえずこのあたりで筆を留める。また、読書子による朱訂は詩語七八七のうちの一一八語に及び、今回採りあげたものは、まさに九牛の一毛に過ぎない。その全貌の紹介も別に機会を得たいと思う次第である。

注

（1）伊藤善隆氏「翻刻『金玉和襟集』」（「湘北紀要」三六　湘北短期大学・図書館委員会　平二七・三）

（2）山田忠雄氏『寛文十年刊金玉和襟集村菴解』（昭六〇　私家版、迂人孟録四五）。迂人孟録は山田氏による私家版の叢書。刊行の経緯は同氏『寿蔵録』（一九九三　私家版）一一一ページ参照。公的機関としては国立国語研究所が三点、国文学研究資料館が八点を所蔵。「極少数の知友」に頒ったものとのことで、名のみ喧伝し、全貌を知ることは難しい。

（3）柳田征司氏『室町時代語資料としての抄物の研究』（一九九八　武蔵野書院）

（4）「雨汀翹二睡鷺一、翹ハ、ツマダツトヨムソ、汀ノ雨ノフルニ、サギガカタシツマタテ、イタナリ、ソノ鷺翹ノ字モ聯字ソ、雨汀モ聯字ソ」（詩学大成抄・八・秋）「衣杵ノ字モ、メツラシイソ、聯字ソ、ツネニハ、砧杵ト云ソ」（同）「試レ繫ノ字面白ソ、聯字ソ」（同・八・新秋）

（5）注2に同じ。

（6）富山市立図書館編『山田孝雄文庫目録』和装本の部（二〇〇七　同図書館）

（7）市古夏生氏『元禄・正徳　板元別出版書総覧』（二〇一四　勉誠出版）

（8）巻頭巻尾に「励」と読むらしい蔵書印が据わるが、朱訂を施した者の用印か否か不明。

（9）注3に同じ。

（10）実践女子大学図書館山岸文庫蔵の元和とも寛永ともされる板によった。

（11）和刻本に五山板、慶長九年跋板などあるがいずれも無点。それゆえ長沢規矩也氏『和刻本辞書事典集成』二（昭五五　汲古書院）所収の寛永八年季秋板によった。カッコ内最後の洋数字はその所収ページである。

（12）ノーモンのこと。研究社の New English-Japanese Dictionary にノーモン（gnomon）を晷針と訳し、大漢和辞典に「表」を「日かげ柱」と言替えるが、国語辞典の類に「ノーモン」「晷針」「日かげ柱」等の立項は見当たらない。

（13）『詩学大成抄』は米沢市立図書館がネットに公開するディジタル版によった。カッコ内最後の洋数字はコマ番号（この例の場合、巻八の第5コマ）。なお、底本に「晋ノ潘岳ガ」を重複させ「ヒ」を傍訓してミセケチにするが、煩を嫌って省略した。

（14）「嬾・懶・嫩（嬾・懶・嫩）」の混淆については萩原義雄氏「『下学集』における字形相似の文字――『和漢朗詠集』所収句の表記字体語注釈から――」（「駒沢短大国文」三六　平一八・三）を参照した。

（15）底本に明暦二年の和刻本を用いた。

（16）易林本節用集も「籜　タケノカハ」とする。

（わたなべ　もりくに・実践女子大学名誉教授）